

## アメリカで学びたいこと

近畿大学 本田真大

私は、阪神淡路大震災、地下鉄サリン事件、同時多発テロ、リーマンショックによる不景気、東日本大震災と悲惨な現実をまのあたりにして生きてきました。「良い大学に入り、良い会社に入社したら、良い人生が送れる」といった、かつての日本の幸せのモデルも崩壊していると感じます。だからこそ、幸せに生きるとはどういうことかを一人ひとり考え、主体的に他者や地域社会に関わることが大切になってきています。

働くことについても、従来のようにある企業に就職し終身雇用される、といった働き方そのものに疑問符が付きつけられています。新しい働き方として、私が注目するのは NPO や社会的企業です。行政が財政難で苦しむ中、今後の地域社会の福祉や環境保全などの事業は、ますます NPO 等に依存せざるをえない状況になっています。しかし、日本では若者が NPO に就職するということが一般的ではありません。また社会的企業のたちあげも活発とは言い難い状況です。他方でアメリカにおいては、こうした非営利事業が若者の就職の立派な選択肢のひとつとなっており、また若者自身が社会的企業の設立に関わる事も少なくありません。私はその背景にどういう事情があるのかを知りたいです。具体的には、以下の3点をアメリカから学びたいと考えています。

1つ目は、働き方の多様性です。日本では働き方に多様性がない（企業への就職という以外の選択肢が少ない）のが若者の閉塞感をもたらす主な原因のひとつとなっていると思われます。これに対してアメリカでは、民間企業以外にも、NPO への就職や起業するなど様々な選択肢があります。例えば全米大学生就職先ランキング上位に Teach For America や Peace Corps など NPO がランクインしています。このことから、アメリカ人学生には社会のために働きたいという意識をもっている人が多い事がうかがえます。

日本の大学生も社会のために働きたいと考える人が増えています。背景には、学生時代に震災ボランティアや国際交流、環境保全等の活動経験があります。彼らは、就職活動の際、社会貢献度と営利目的が自分の価値観と合った企業にエントリーしています。彼らと同じく私もボランティア団体を設立し、東日本大震災のボランティア実習を企画しました。また、途上国の貧困問題を改善するためのフェアトレード推進活動も行ってきました。私も就職活動では、自分が社会に対してどのような価値を提供したいか考え、来年から障害者就労支援や教育を行う会社で働きます。

またアメリカでは、多様な文化や価値観を持った人々が共に働いています。日本でも海外の人材を積極的に雇用する動きが見られます。人々の価値観が複雑化していくにあたり、どのように周囲と連携していくのか。また、グローバルな環境で、日本人はどのように適応してきたのかを現地で暮らす日本人から学びたいと思っています。

2つ目は、アメリカの寄付文化です。上記のような多様な働き方を可能にしている背景のひとつとして、寄付文化とそれを支える制度があると思うからです。私は、障害者の余暇支援活動の団体に所属しています。

活動時にネックとなるのが、金銭面です。企画の際にお金が必要となり、利用者から集めるだけでなく、財団の助成金や他者に寄付金を頂き、何とか運営をしています。

日本では、まだまだ個人や組織の寄付がアメリカと比べ多くありません。要因として、アメリカと日本の寄付に対する2つの違いがあります。まず、アメリカ人の寄付習慣です。アメリカでは「お金を持っている人が、貧しい人に分け与えるべきである」というキリスト教の考え方による影響が大きいといわれています。

次に寄付税制です。この制度により、人々が公共を支える自治体や国に税として納めるか、公共を支えるNPOに寄付して社会的投資ができるかを主体的に選択できます。私は、日本でも寄付税制が行われ、NPOが継続的に活動できる社会を実現したいと考えています。アメリカでは、個人や組織が寄付をどのようにとらえているのかを学びたいです。

3つ目は、アメリカ人の主体性です。帰国子女の多くは、日本人は、アメリカ人のように自信を持ってコミュニケーションをするべきだと話してくれます。日本では、遠慮や奥ゆかしさが美德であると考えられている事もあり、自信を持ち、意見を主張し行動することが苦手な部分もあります。その事は政治や社会に対して、傍観者的態度をとる傾向につながっていると感じます。それは私も昨年大阪青年会議所主催の世界学生平和会議に参加し実感しました。世界の学生は、学んだ事を発信する質がとても高く、どの学生も自信を持って発言していました。アメリカで学びたい事は、自信を持って意見を主張することにある背景です。自信を持つことが、当事者自らが主張し、行動をもたらし、社会を変え、幸せな生活を獲得できることにつながると考えるからです。